

Measuring Individual Differences in Theory of Mind : An Adaptation of an Interview Method for Japanese Adults

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): Theory of mind, Interview, Mental state language, Japanese language, individual differences, adults 作成者: TSUJI, Hiromi, YAMAZAKI, Ayaka, FUJIWARA, Hazuki メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4022

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



心の理論インタビューの青年期後期から成人期の日本人女性への応用

—心の理論インタビューでどこまで他者の心的状態理解が測定できるか—

学芸学部 心理学科 辻 弘美
心理学部 発達教育心理学科 山崎 綾香・藤原はづき

要旨：本研究は、欧米で開発された心の理論の個人差を測定するためのインタビュー課題（Bosacki, 2000）を日本語話者に応用することを目的とし、その可能性について検討した。インタビュー課題は2つのテーマからなり、それぞれ曖昧な文脈で起こる出来事をストーリー刺激として呈示した。ストーリーを聞いた後、参加者には、面接者の質問に答える形式で、出来事の因果や登場人物の心的状態について自分の解釈を回答してもらった。回答を、どの程度登場人物の内面や出来事の因果に言及しながら解釈をしているかの視点からコーディングし点数化した。本研究では、青年期後期から成人期の日本人女性として、母親と女子大学生を対象にして出来事の因果や登場人物の心的状態への言及の程度の個人差を測定した。インタビュー得点の分布の正規性および、内的整合性は許容範囲内であった。インタビュー得点は心的因果の認知を測定するとされる Empathizing Quotient: EQ との有意な正の相関が認められた一方で、Interpersonal Reactivity Index: IRI の個人的苦痛とは有意な負の相関が認められた。母親は女子大学生に比して心の理論インタビュー得点が高かった。これらの結果をもとに、インタビュー課題を用いた心の理論の個人差の測定可能性について考察した。

キーワード：心の理論、インタビュー、心的状態語、日本語、個人差、成人期

問題と目的

心の理論とは、他者の内的状態（感情・思考・信念）を推論する枠組みをさす。心の理論の発達研究は幼児期から児童期にかけてはこれまでに盛んに行なわれ、特に幼児期の発達過程については多くの知見が積み上げられてきた。一般的に発達のパターンは普遍的であるものの、その時期には、文化的背景や課題などによって多少のズレがあるとされている（Liu, Wellman, Tardif, & Sabbagh, 2008; Wellman, Cross, & Watson, 2001）。一方で青年期以降の心の理論の発達過程については、近年始まったばかりである。心の理論の個人差を測定する道具として Baron-Cohen (2003) が Mind in the eye test や EQ 尺度を開発している。

青年期以降の心の理論の発達を測定する課題としては、他者の視点を踏まえてその意図を正しく読み取る判断をもとめるもの（Devine & Hughes, 2013; Dumontheil, Apperly, & Blakemore, 2010; Happé, 1994; Keysar, Lin, & Barr, 2003）、短いエピソードに

描かれた登場人物の心的状態を説明するもの（Devine & Hughes, 2013; Happé, 1994）等があるが、より日常一般的な文脈で個人が心の理論の枠組みを適応しているかを測定している課題は少ない。そこで本研究では、青年期前期の心の理論の発達を測定する方法として、欧米で用いられたインタビュー形式の心の理論課題（Bosacki, 2000）を日本語話者に適応できるかについて検討することを目的とする。

今回用いる課題は Bosacki (2000) によって考案され、青年期前期の10代を対象としてその個人差を測定し、それらと自己概念の発達との関連性について検討している。Bosacki (2000) は、日常社会的な文脈において曖昧な出来事が描写されているビッグネットを用い、その場面の解釈についてインタビュー形式で回答を求めている。その反応について、解釈とその理由付けが、どこまで他者の内的状態について考えているのかを言語化された部分について評価する形式で測定している。

本研究では、心の理論の個人差およびその発達を測定するツールとして日本語話者への応用を目的としていることから、既存の心の理論を測定する尺度として Baron-Cohen (2002, 2003) による Empathizing Quotient: EQ 尺度との関連性を検討する。Baron-Cohen によると、Empathizing Quotient: EQ 尺度は心的因果の認知、すなわち他者の感情や信念を特定するとともに、そこから他者の行動を予測する傾向としての個人差を測定するとしている。よって、心の理論インタビューでは、曖昧な場面において、登場人物の内面（感情・信念・考え）に関する側面から場面の出来事の因果を表現する傾向が高ければ、その個人は EQ 尺度においても高い数値を得ると仮定できる。よって、これらの変数間の正の相関が予測される。

また、EQ は広義的には共感性としても解釈されることから、別途、共感性を測定する尺度との関連性も検討する。EQ 尺度は認知的な側面の共感性を測定しているとされている (Baron-Cohen, 2002) ことから、認知的な共感性以外の側面との関連性の可能性を検討するために、多次元共感性尺度 (Interpersonal Reactivity Index, Davis, 1983: 日本語版、登張、2003) より、情動的共感性、架空 (ファンタジーにおける) の場面での感情移入などの共感性を測定する指標を用い、これらと心の理論インタビューとの関連性を検討する。

方法

研究対象者 幼児期の子どもをもつ母親 34 名 (年齢 M=35.5 歳、SD=5.3) および女子大学生 47 名 (年齢 M=20.0 歳、SD=1.2) を対象とし、心の理論インタビューを実施した。心の理論インタビューは、表情認知実験、質問紙への回答を含んだ一連の個別セッション (約 60 分) の一部として実施した。

ToM インタビュー課題

曖昧な場面における登場人物の内的状態についての解釈を求め、その回答内容を評価するために考案された課題 (Bosacki, 2000) を用いた。原著のストーリー課題を日本語話者向けに一部改変し、インタビュー・プロトコルは原著に沿って実施した。課題は、2つの独立したテーマ (課題①女の子とブランコ/課題②校外学習) からなった。原著では、課題①のストーリーラインはそのまま登場人物の名前を変更した。課題②は原著ではフットボールのチーム編成に関する刺激ストーリーを用いていたが、予備調査より、本実験の

対象者が女性であることから、よりなじみのある経験として校外学習時のメンバー編成という設定で原著と平行したストーリーラインに変更した (Figure 1, 2 を参照)。

ナンシーとメアリーは運動場で遊んでいる子たちをみています。ナンシーは、黙ってメアリーにそっと触れると、ついさきほどやって来てブランコで遊んでいる女の子に目をやりました。ナンシーは、メアリーの方を見てにっこりとしています。メアリーが「うん」とうなずくと、2人は女の子のいるブランコのところに行きました。

女の子は、見知らぬ2人が自分の方に歩いてくるのを見ています。その女の子は、この2人がさっきから、お互いに近寄ってにっこりしている様子を見ていました。女の子にとってこの2人は同じクラスですが、今まで話をしたことがありません。女の子は、2人が何をしにこちらにくるのだろうと思っています。

Figure. 1 課題①「女の子とブランコ」のテーマ

敦子と裕子は校外学習の行動班を決めています。行動班は1グループ3人でなければなりません。

何も言わずに敦子は、まだ行動班が決まっていない美香の方を見ました。それから敦子は裕子の方を見てにっこりしました。裕子は「うん」とうなずいて、美香を同じ行動班のメンバーに入れました。

美香は、敦子が裕子ににっこりしたのを見ています。美香は、敦子と裕子と初めて同じクラスになりました。美香は、どうして自分を同じ行動班のメンバーに入れたのだろうと思っています。

Figure. 2 課題②「校外学習の行動班」のテーマ

手続き

刺激ストーリーの呈示はパソコンで行った。文章とともに、女性によって読みあげられた録音音声を再生し行った。対象者には、ストーリーを聞きながら、文字を追っていく中で、自分なりにイメージを膨らませるよう教示した。刺激ストーリーの提示後、基本的な内容理解の確認質問を行った。次に曖昧な場面内容の解釈について、次の視点から質問を行った。回答に正解はないので、ストーリーを聞きながら自分がイメージした内容に沿って質問に答えるよう指示し、構造化面接の質問をした。インタビューのプロトコルは次のとおりであった。①視点取得に関する質問としては、‘なぜナンシーはメアリーににっこりしたのですか’、‘なぜ、メアリーはうなずいたのですか’、‘なぜ2人は女の子のところに向かっていったのですか’ ②共感的配慮に関する質問としては、‘女の子はどのような気持ちでいますか’ ‘なぜそのように解釈しました’ など③登場人物の性格の認識に関する質問としては、‘登場人物の中の1人についてどんな人物かについて教えてください’ ④異なる解釈の質問については、

‘このお話を聞いて、今解釈した内容とは異なる解釈があれば教えてください’であった。テーマごとにインタビューを行い、回答は全て録音した。所要時間は2課題合わせて15～25分であった。

分析

英語話者の青年期の男女を対象とした原著 (Bosacki, 2000) に従い、回答内容がどの程度複雑な心的状態を含んでいるかによって点数を与えた。回答内容のコーディングは2名が独立に行った。コーダー間の一致度は94%であった。不一致項目については議論の上、コーディング内容を決定した。

主観的評価尺度

共感性と情動表出に関する主観的評価を用いるために以下の3つの尺度から構成された質問紙および表情認知検査票をインタビューの前後どちらかに実施した。

共感性の評定には Emotion Quotient: EQ 尺度日本語版 (若林ら、2006) および対人的反応尺度: IRI (登張、2003) より、「個人的苦痛」「ファンタジー」の下位尺度を用いた。情動表出の評定には、Barkley Expressivity Questionnaire: BEQ (Gross & John, 1995) を用いた。BEQ については著者らが原著を和訳したものにバックトランスレーションを行って内容の確認を行った。

子ども版表情認知検査 (小松・箱田、2012) は、検査手続きに従って実施および採点を行った。

結果

心の理論インタビューの各質問への回答がどの程度複雑な心的状態を含んでいるかによって点数を与えた。個人の得点の分布について検討したところ内的整合性 (Cronback's $\alpha = .72$) および分布の正規性は確認できた (Shapiro-Wilk $W = .98, p > .05$)。これらのインタビュー得点 (下位得点および合計点) の記述統計を母親と女子大学生のグループごとに Table 1. に示す。

次に、女子大学生と母親を独立群とし、心の理論インタビュー総合計得点を従属変数として比較したところ、どちらの課題においても、母親群が女子大学生群より有意に得点が高く: $t_{\text{課題①}} (79) = 2.5, p < .05$ 、 $t_{\text{課題②}} (79) = 3.2, p < .01$ 、2つの課題の総合計得点についても、同様の結果が得られた: $t (79) = 3.2, p = .006$ 。下位得点について同様に検討したところ、①視点取得: $t (79) = 1.6, n.s.$ および②共感的配慮: $t (79) =$

Table 1. ToM インタビュー得点の記述統計

	M (SD)		Min- Max	
	母親	学生	母親	学生
視点取得合計	13.8	12.8	9.0	7.0
(0-18)	(2.4)	(2.8)	18.0	18.0
共感的配慮合計	6.5	6.3	3.0	2.0
(0-12)	(1.6)	(1.6)	10.0	10.0
登場人物の性格合計	3.7	3.1	2.0	1.0
得点 (0-6)	(1.1)	(1.0)	6.0	5.0
異なる解釈合計	2.9	1.3	0.0	0.0
(0-6)	(1.7)	(1.3)	6.0	4.0
課題①合計	13.6	12.0	9.0	6.0
(0-21)	(2.7)	(2.9)	21.0	18.0
課題②合計	13.4	11.5	6.0	7.0
(0-21)	(3.1)	(2.2)	20.0	18.0
総合計	26.9	23.5	16.0	15.0
(0-42)	(5.0)	(4.6)	37.0	34.0

.57, n.s. には有意差はなかったが③登場人物の性格の認識: $t (79) = 2.7, p = .006$ ④異なる解釈: $t (79) = 4.81, p < .001$ にそれぞれ有意差が認められ、母親群が女子大学生群よりも点数が高かった。

心の理論インタビューと共感性、表情表出、子どもの表情認知との関連性の検討

共感性に関する主観的尺度 EQ および IRI, 表情表出傾向を測定する BEQ の内的整合性は、それぞれ EQ: $\alpha = .86$, IRI 個人的苦痛 $\alpha = .86$, IRI ファンタジー $\alpha = .80$, BEQ: $\alpha = .81$ であった。

子どもの表情認知検査については、検査手引きに沿って採点した。これらの測定結果の記述統計を Table 2 に示す。

次に女子大学生と母親を独立群とし、それぞれの変数について平均値を比較したところ、IRI: 個人的苦痛: $(79) = 3.16, p = .002$ 、を除いては、有意な差が見られなかった。次に、これらの変数間および心の理論インタビュー得点との関連性を検討した。ピアソンの積率相関指数を Table 3 に示す。

共感性に関しては、EQ は IRI: 個人的苦痛と有意な負の相関が認められたが、ファンタジーとは有意な相関が認められなかった。また共感性と表情認知の関連性に関しては、EQ は表情認知と有意な正相関が認められたが、個人的苦痛は表情認知と有意な負の相

Table 2. 共感性、表情表出傾向、表情認知の平均値と標準偏差

変数	M (SD)		
	母親	学生	全体
EQ (0-60)	37.68 (9.63)	34.60 (11.53)	35.89 (10.81)
IRI:個人的苦痛 (0-5)	2.48 (0.89)	3.10 (0.83)	2.84 (0.90)
IRI:ファンタジー (0-5)	3.62 (0.89)	3.60 (1.00)	3.61 (0.95)
BEQ (0-5)	3.54 (0.63)	3.70 (0.47)	3.63 (0.54)
表情認知得点 (0-32)	22.65 (2.60)	21.47 (3.26)	21.96 (3.04)

Table 3. 心の理論、共感性、表情表出傾向、表情認知間のピアソンの積率相関指数

	EQ	個人的苦痛	ファンタジー	BEQ	表情認知
心の理論	.296**	-.289**	.063	-.030	.195
EQ		-.493**	.047	-.008	.242*
個人的苦痛			.076	.258*	-.298**
ファンタジー				.273*	-.019
BEQ					-.075

* $p < .05$; ** $p < .01$

関が認められた。表情表出傾向 BEQ については、IRI の個人的苦痛およびファンタジーともに有意な正の相関が認められた。心の理論は、EQ とのみ有意な正の相関が認められた。次にこれらを心の理論インタビュー得点の説明変数として、階層重回帰分析（ステップワイズ法）を行った結果を Table 4 に示す。

モデル 1 では、グループ変数（母親群、女子大学生）を投入したところ、この変数が心の理論インタビュー得点の分散の 12% を説明していた。次にモデル 2 では、グループ変数を統制した上で、共感性、EQ、IRI 個人的苦痛、IRI ファンタジーおよび感情表出傾向を投入したところ、EQ のみが有意な説明変数であると認められた。またグループ変数と EQ をあわせて、18% の心の理論インタビュー得点の分散を説明していた。

Table 4. 心の理論得点を従属変数とした重回帰分析の結果

Model	I V	beta	t	R ²	R ² change
1	Group				
	1. 母親				
	2. 女子大学生	-0.34	-3.20**	0.12	.12**
$F(1, 79) = 10.25^{**}$					
2	Group				
	EQ	0.25	2.44*	0.18	.063*
$F(2, 78) = 8.42^{**}$					

* $p < .05$; ** $p < .01$

考 察

本研究は、青年期以降の心の理論の測定を可能にする方法の一つとして、Bosacki (2000) の提唱する構造化面接を日本語話者に適用するための試みについて検討した。Bosacki は、社会的文脈が曖昧な中で展開される出来事を、第三者としてどのように解釈するか、その解釈において、異なる人物の視点からどれだけ他者の内面を描写しているかを用いて、児童期以降の心の理論を測定しようとした。先行研究では、青年期前期ということもあり、顕著な心の理論得点の性差（女性 > 男性）が報告されている。Bosacki は青年期前期の男女を研究対象としてきたが、本研究では、青年期から成人期にかけての女性を対象としてきた。そこでまず、本研究の心の理論得点の分布について先行研究と比べることとする。Bosacki (2000) では、心の理論得点（2 課題込み：0-42 点）で、平均値（標準偏差）が男子 26.00 (6.21)、女子が 30.25 (4.64) であった。これらと比較すると、本研究の中で有意に女子大学生より数値が高かった母親の点数 26.9 (5.0) においても英語話者の女子より有意に低く： $t(96) = 3.31$, $p = .001$ 、欧米男子と同程度であることがわかる： $t(96) = .73$, ns。一方、日本語話者の女子大学生については、英語話者の男子： $t(109) = 2.33$, $p = .022$ 、および女子： $t(109) = 7.60$, $p < .001$ 、よりも有意に低い点数であることがわかる。青年期の心の理論については、その発達が生線的なものなのか、それとも、平均的には大きな年齢的な変化はなく、むしろ個人差や性差が顕著になってくるのか、その詳細についてはわかっていない。しかしながら、青年期前期から青年期後期にかけて心の理論が低下することは考えにくいことから、心の理論インタビュー形式の測定に関しての、日本語話者の心の理論の点数の直接的な比較においては英語話者のそれよりも低い可能性が示唆されるといえる。得点差がみられたことが、直接日本人が欧米人

に比べてマインドリーディングの能力が低いということを示すというよりは、言語的な表出が、青年期前期の英語話者より有意に少ないという解釈の方が適切であろう。一方で心の理論インタビューを測定ツールとしてみると、Basacki (2000) の報告では、インタビュー回答のコーディングの内的信頼性 (Cronback's α) が .67 から .69 であったことに対し、本研究でも .72 であったことから同程度の信頼性を得ることができたといえる。

次に心の理論インタビュー得点と共感性および感情表出傾向、表情認知との関連性について考察する。本研究では、心の理論インタビューがどのような側面を測定しているのかについて検討するため、心の理論の研究でとりわけ質問紙として扱われている Baron-Cohen の提唱した心の理論に関する Empathizing-Systemizing モデル理論のうちの EQ: Empathizing Quotient 尺度との関連性を検討した。また共感性に関して様々な概念の定義がされている中で、多次元性共感性をとらえた尺度、IRI: Interpersonal Reactivity Index (Davis, 1983) についても、EQ との対比をするために検討対象とした。さらに、個人の内的な共感傾向のアウトプットとしてこれらがどの程度感情表出傾向や、表情認知に反映されるかについても、心の理論との関係をさぐるための検討対象とした。

心の理論インタビュー得点は、EQ とは正の相関が認められた一方で IRI の個人的苦痛とは負の相関が認められた。Baron-Cohen (2002, 2003) の説明する EQ は、他者の感情や考えを特定し、それに対して適切に反応するという動因であり、認知的反応のなかでも、心的因果の認知側面を測定しているとしている。よって EQ と心の理論インタビュー得点に正の相関がみられたことについては、心の理論インタビューが少なくとも EQ と類似した側面を測定していると考えられる。

一方で、心の理解インタビューと負の相関がみられた IRI 尺度の下位尺度であった個人的苦痛とは、援助等が必要な他者を見た時などに自分も不安になってしまい、その状況に対応できない傾向を測定している。すなわち他者に感情がむかわず、自分中心の感情反応が生起する傾向と関連している (登張、2003) ことを考慮すると、これらは、比較的自動的に生起される情動的共感に近いとも考えられる。よってこのような情緒的共感反応を比較的冷静に対処できるほど、心の理論のインタビュー得点が高かったといえる。これらの結果より、心の理論インタビューが測定していたもの

は、他者視点取得などの認知的共感性であると考えられることができる。

心の理論インタビュー得点は、個人差を伴うであろう表情認知や感情の表出傾向とは直接的な関連はみられなかった一方で、EQ は、表情認知と正の関連が認められた。一つの仮定としては、認知傾向の一つとしての EQ は、表情認知検査で測定した人の表情の解釈と、心の理論インタビューで測定した他者の心的状態の言語表象化との両面と独立に関連しているという可能性が考えられる。同じく今回の分析で心の理論インタビューとは直接関連性がみられなかった BEQ についてであるが、IRI の 2 つの下位尺度とは正の相関がみられた。IRI の下位尺度である個人的苦痛とファンタジーがお互いに有意な相関がみとめられないことより、BEQ についても IRI のそれぞれの尺度と独立に関連があると仮定できる。

以上、心の理論インタビュー得点との関連から、インタビューでどのような側面を測定していたかについて議論してきたが、インタビュー形式の測定には様々な課題が残されている。まず、測定に時間的なコストがかかるということである。本研究においても、80 名以上の協力者を対象として個別のインタビューを実施し、これらについての言語回答を分析することに多くの時間が費やされた。質問自体が構造化面接であることから、質問紙形式での回答に置き換えることによって、分析の時間短縮は可能になるかもしれないが、現在のところ、質問紙形式で同等の質問に回答を求めた場合、十分な内的整合性が認められていないなど (辻、2015) 質問紙形式での信頼性の高い回答を得ることができるかについては、さらなる検討が必要である。インタビュー形式で行った場合、質問者とのインタラクションが、一貫した回答を促す助けをするが、質問紙の場合にはそのような回答を意欲的に行なうか否かの動機付けが難しい可能性もある。このようなことから、一貫性のある回答を得るためには、時間的なコストをかけてもインタビュー形式の測定が必要であるのかもしれない。そのような視点から考えると、本研究の結果より、インタビュー形式においても、EQ とともに日本語話者の心の理論の個人差を測定することが可能であったといえよう。実施に関しては、質問紙に比べてコストがかかる点が課題であるが、EQ 尺度などの質問紙で測定しきれない側面を心の理論インタビューで測定できる根拠を示すことができれば、その活用に向けて大きな意義がうまれてくるといえる。

引用文献

- Baron-Cohen, S. (2002). The extreme male brain theory of autism. *Trends in Cognitive Sciences*, 6, 248-254.
- Baron-Cohen, S. (2003). *The essential difference: The truth about the male and female brain*. New York, NY, US: Basic Books.
- Bosacki, S. L. (2000). Theory of mind and self-concept in preadolescents: Links with gender and language. *Journal of Educational Psychology*, 92(4), 709-717.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44(1), 113-126
- Devine, R. T., & Hughes, C. (2013). Silent Films and Strange Stories: Theory of Mind, Gender, and Social Experiences in Middle Childhood. *Child Development*, 84(3), 989-1003. doi:10.1111/cdev.12017
- Dumontheil, I., Apperly, I. A., & Blakemore, S.-J. (2010). Online usage of theory of mind continues to develop in late adolescence. *Developmental Science*, 13(2), 331-338. doi:10.1111/j.1467-7687.2009.00888.x
- Gross, J. J., & John, O. P. (1995). Facets of emotional Expressivity: Three self-report factors and their correlates. *Personality and Individual Differences*, 19(4), 555-568. doi:http://dx.doi.org/10.1016/0191-8869(95)00055-B
- Happé, F. (1994). An advanced test of theory of mind - understanding of story characters thoughts and feelings by able autistic, mentally-handicapped, and normal children and adults. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 24, 129-154.
- Keysar, B., Lin, S., & Barr, D. J. (2003). Limits on theory of mind use in adults. *Cognition*, 89(1), 25-41. doi:10.1016/s0010-0277(03)00064-7
- 小松佐保穂子・箱田裕司 2012 子ども版表情認知検査 株式会社トヨーフィジカル
- Liu, D., Wellman, H. M., Tardif, T., & Sabbagh, M. A. (2008). Theory of mind development in Chinese children: A meta-analysis of false-belief understanding across cultures and languages. *Developmental Psychology*, 44(2), 523-531. doi:10.1037/0012-1649.44.2.523
- 辻弘美 (2015) 成人期の心の理論の個人差を測る：測定方法の検討, 日本心理学会 79 回大会, 名古屋
- 登張真稲 (2003) 青年期の共感性の発達：多次元的視点による検討 発達心理学研究 14, 136-148.
- 若林明雄・サイモンハーロン・コーエン・サリーウィー
ルライト (2006) Empathizing-Systemizing モデルによる性差の検討 I Empathizing 指数 (EO) Systemizing 指数 (SQ) による個人差の測定 - 心理学研究 77(3), 271-277
- Wellman, H. M., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: the truth about false belief. *Child Development*, 72, 655-684.

Measuring Individual Differences in Theory of Mind: An Adaptation of an Interview Method for Japanese Adults

Faculty of Liberal Arts, Department of Psychology

Hiromi TSUJI

Faculty of Psychology, Department of Developmental and Educational Psychology

Ayaka YAMAZAKI

Hazuki FUJIWARA

Abstract

The present study examined an interview method for measuring the theory of mind and its adaptation to a young adult Japanese population. The original interview method devised for English-speakers (Bosacki, 2000) used an ambiguous story to probe the interviewee's mental state references and causal explanations when interpreting the story. The verbal responses were coded and scored in the same way as the original study. In this study, we compared the scores of Japanese mothers and female university students. The distribution and internal consistency of the interview scores were analyzed and found to reach at an acceptable level. The interview scores correlated positively with cognitive empathy measured on the Empathizing Quotient Scale and also correlated negatively with the Interpersonal Reactivity Index in a subordinate measure of "personal distress". The mothers' interview scores were significantly higher than the female university students. Drawing on these results, the extent to which this interview method can be used to measure a Japanese-speaking population of young adults and adults was discussed.

Keywords: Theory of mind, Interview, Mental state language, Japanese language, individual differences, adults